加茂神社の神事と小判餅（加茂）

稲引き、樽引き神事

その年は雨降りや曇りの日が多くて、稲も不作かと思われていましたが、秋口になってからよいお天気が続き、どうにかこうにか稲穂がふくらんできました。頭を垂らした黄金色の稲穂を見て、村人たちはほっとしたものでした。

加茂村でも村人たちが仕事に精を出しています。稲を刈り、わらでくくって束にして稲木にかけます。こうしておくと稲が早く乾燥できるのです。稲束をいっぱいにかけた稲木が、あちらの田んぼにもこちらの田んぼにもできていきました。

あくる朝早く、昨日の仕事のでき具合を見に行った村人が思わずつぶやきました。

「あれ、おかしいぞ。あそこの稲木まで稲をかけたはずなのに……。」

稲の束がなくなっているのです。ふしぎでしたが、その村人は勘違いをしていると思うことにしました。でも次の日も、そのまた次の日もあちこちで同じことが起こりました。

「端まできっちりかけていた稲がなくなっている。」

「うちも昨日なくなった。おかしいぞ。」

村人ちはとうとう見張りを立てることにしました。稲の束がなくなるわけをつきとめようとしたのです。

夜が来てあたりが暗くなったころ、見張り役の村人たちはこっそり隠れて見張っていました。夜もふけましたが、何も起こりません。

「もう今日は何も起こりそうにない。」

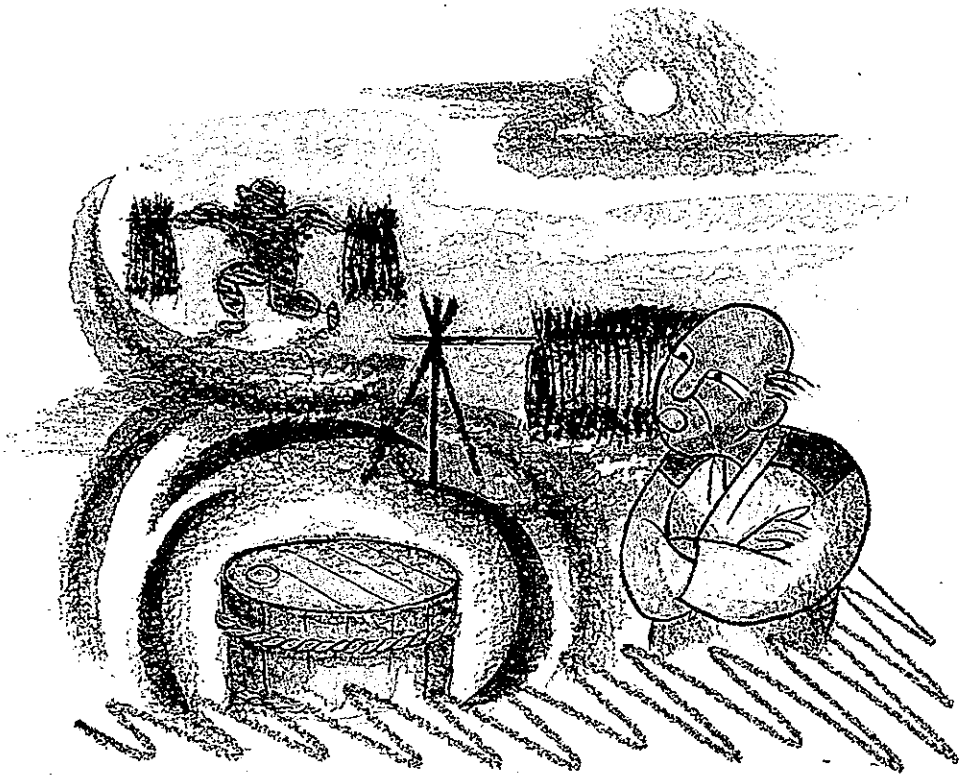
「今日のところは帰るとするか……。」

するとその時、怪しい人影が現れたのです。

人影はじいっとあたりの様子をうかがっています。しばらくすると、人影は稲木に近づいていきました。手早く稲束をおろすと、その稲束同士をいくつかくくりつけました。二つの大きな束にして、てんびん棒の両側にぶら下げて歩きはじめました。どこへ行くのかと後をつけていくと、なんと神社の方へ行くではありませんか。

神社の境内まで来ました。怪しい人影は、追いかけてくる人の気配に気づいたのか、ぎくりとしたようにふりかえりました。

「あれぇ、うちの神さんではないかっ。」
そういえば、神さんとこは子沢山で食べ物にも事欠く有様らしい。だからといって人のものを勝手に持っていくことはよくないことです。村人たちは困って相談しました。
「神さんだからというて、勝手に持っていってはいかんなあ。」
「でもわしらには大切な神さんじゃ。何とかならんかのう。」
「取れたお米はどうせお供えするのだから、まあ、そっとしておこう。」
「それがよい、それがよい。」
村人たちの相談はまとまりました。
あくる日、稲木のところにお酒の樽がおいてありました。村人たちにはそれが何を意味しているのかすぐにわかりました。
「きっと神さんが謝っておられるのじゃな。」
「人の物をとるのはよくない、もうしませんと言っておられるようだよ。」
村人たちには神さんの気持ちがよくわかりました。村人たちは神さんからいただいたお酒をみんなで酌み交わしま



した。そしてその晩からは、稲木の稲がなくなることは一度もなかったということです。

加茂神社では秋祭りの宵宮に、「稲引き、樽引きの神事」が行なわれています。神前の儀式が終わると、参道に集まった人たちの松明に火がつけられます。その中を稲束をくくりつけたてんびん棒をかついだ稲引き役が松明を手に境内の方へ走りこんでいきます。それをまわりの人たちが追いかけ、稲束を取り返そうとします。それぞれが手にした松明がぶつかり合い、火花が飛び交います。

しばらくくるくると円を描くようにもみあったあと、稲束が神前におさめられます。

この稲引きの神事が終わると、今度は樽引きの神事です。神前に置かれていた酒樽を担いだ若者が境内の方へかけだし、若者たちが樽を引っ張り合いながら、もみ合います。そして、最後には樽を割るのです。

このように加茂神社では、秋祭りに宵宮の神事として、このできごとを再現しているということです。

一両二分の小判もち

九鬼の殿様が鳥羽から三田に国がえになってこられたときのことです。殿様はご自分の屋敷近くにある天満神社を国の氏神とされました。そのころの秋祭りは天満神社が十月二日で、加茂神社が前日の一日でした。

殿様は、氏神の天満神社の祭りをきりのよい一日にしたいと考えました。

「でも殿様、加茂神社の祭りも十月一日に行われています。同じ日に祭礼をするというのも具合が悪いのではないでしょうか。」

「それならば、加茂神社の祭りを二日に変えさせよ。」

さっそくお殿様は、加茂神社に使いを送られたのです。

「加茂神社の祭りを十月二日にかえてもらいたいという殿のお考えである。いかがでござろうか。」

ところが、加茂神社は、

「お殿様の申し入れならば、お聞き入れしたいのは山々ですが、神さんのお祭りのことですので、神さんにお許しをいただかないとお返事できません。」

と、言ってきました。

それを聞いたお殿様と家来たちは考え込んでしまいまし

た。

「さようか。神さんのことなので、無理強いはできまいの。」

「どうでしょう。いささか金子を渡してみましたら。」

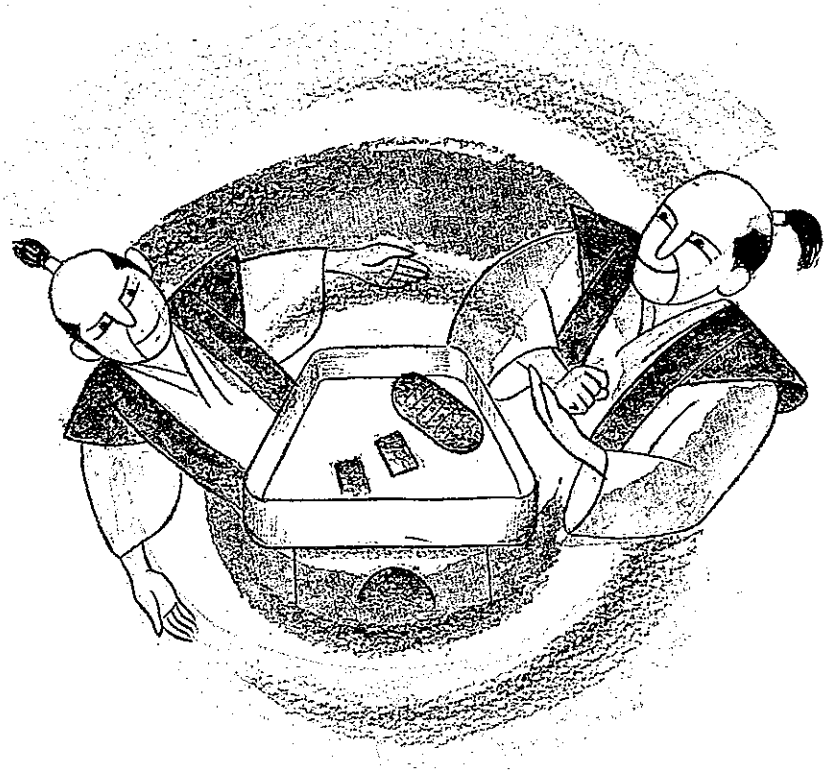
殿様もなるほどと思いました。

いくらにしたらよいか、家来たちが相談しています。

「一日を二日にするのだから、一両と二分がよかろう。」

「それがよい。一、二の三田で、一両と二分がよかろう。」

このようにして、一両二分に意見が一致しました。

加茂神社では、殿様の申し出をむげに断るわけにもいきません。それに、もとはといえばこの神社も、菅原道真公をおまつりし、天満神社といっていたぐらいでした。殿様から一両二分をいただき、祭礼の日を二日に変えることになりました。

それからというもの、お供えの餅を一両小判の形と、一分銀をかたどった形にこしらえ、小判一枚と一分銀二枚を一まとめにした「一両二分の餅」をお供えすることになりました。そして、お下がりとして、祭りの神事に参加した人に配るようになったということです。